

初段 仙洞御所の段

忠なるかな忠、信なるかな信。勾踐こうせんの本意を達たつす陶朱公、功なり名遂げて身退しりぞく。例をこゝにためし

唐倭からやまと、四海漸ようよう穏やかに、皆白旗と時めきて、

武威ぶいはますく盛さかなり。

仙洞の御所後白河ごしらかわの法皇が忠臣、左大臣の左大将

藤原朝方ふじわらのともかた、君の御覧おんおぼえよきまゝに、依怙えこひ鼻肩ひいきの沙

汰おおかた大方ならず、おのゝ胸におさめる

ほどもあらせず源氏の大將、源九郎判官義経みなもとのかぐろろうぼうがん、

院参いんざんのそのよそほひ派手を尽くせし太刀飾り

供は武蔵坊弁慶むさしぼうべんけい、大紋だいまんの袖立たてえぼし烏帽子、僧衣はばかを憚おそる

出で立ちいは、実げにも由々ゆづしく見えみにける

左大将見やり給たまひ

「如何いかに義経やしま、このたび八島の合戦あつの様子、法

皇委くわしく聞きこし召よさず。安徳帝あんとくご入水じゆすい、平家一

門の最期さいし、つぶさに申し上げよ」

とある

義経『はつ』と承り

「さん候ぞうろう。この度の戦いくさひ、平家は千騎、義経が

勢せいは僅すくなくか四百余騎しひやく、只事ただごとにては勝かちつことなしと

奇策きさくをめぐらし不時ふじに攻めかくれば、慌あわてふた

めき平家の軍勢いくさ、船に取り乗りおきな沖中おきなへ天皇を具

し奉たてまつる。その時城ときに火を放ち明あかりに眼覚まなこませ

しやらん、能登守教経のとのかみのりつねしやうせん小舟こふねに乗り移うつり、希代きたいの

※1 まごころと、うそいつわりのない思い（本作の主要人物のひとりである佐藤忠信の名を暗示し、源義経の、兄頼朝に対する思いを称える）。

※2 中国春秋時代の越の勾踐に、恥辱をはらし復讐を遂げさせた家臣陶朱公のように、立派な仕事を成し遂げ名声を得た後には、その地位を退くのが理になつた態度である。その中国の例と同じように、頼朝が天下を治める上で多大な功績をあげた、義経の隠された物語を語りはじめよう。

※3 天下もようやく穏やかに治まり、平家の赤旗から一変して源氏の白旗が盛んに翻り、武家の威光はますます盛んである。

※4 並々でなく。

※5 院の御所に参上すること。

※6 立派な様子に。

※7 史実では、屋島ではなく壇ノ浦の合戦の敗北をもって平氏滅亡としているが、本作は一連の戦での出来事を「屋島の合戦」に集約している。

※8 思いがけない時に急襲をかけたので。

弓力引きつめ差しつめ射たる矢先は佐藤継信、

あばらに受け馬より下にどうど落つ。弟佐藤

忠信ただのぶが射かへす矢先に敵味方、その日の軍はさ

つと引く。明くれば敵より出す扇、与一宗高射

て落とす、箕尾谷景清みおのやかけきよしひろ鍛引き敵が感ずる味方

が誉むる。されども源氏は勝軍、平家は軍兵

討ちなされ能登守教経、安芸あきの太郎同じく次郎、

二人を左右に引つ挟み海へかつぱと飛び入つた

り。新中納言知盛とももりも、御所の御船の御供とこれ

もぞんぶと入水して果つ。安徳帝の御事は、や

はかと存ぜし油断すきの隙、二位にいのあまじよう尼上御供し海へ

入り給ふと聞いたるばかり、御骸みきがらをも求め得

ず、女院ばかり助かり給ふ次第※1にて候

と、いと爽やかに申し上ぐ

朝方苦つたる気色※2にて

「それほどの功ある義経、兄頼朝よりともに对面叶はず

何ゆゑ腰越こしじえより追ひ返されしぞ、その科とがを言へ、

聞かん※3」

と聞くより、弁慶進み出て

「わが君のためには御兄なれど、ぬるい生まれ

の蒲冠者かばのかんじやのりより範頼卿、軍の手柄なきまゝに頼朝公へ

しかぐと秘かな讒言ざんげん、それと気づかぬ鎌倉殿

も無詮議ぶせんぎ※4」

と言はせも果てず

「シヤ黙れ弁慶。たとへ讒者の業わざにもせよ、一
旦の兄の命めい申し開かず腰越より帰りしは、弟の

※1 源氏は勝軍の勢いにのり、平家は軍兵も

ほとんど討たれ、能登

守教経（平教経）は、

安芸の太郎と次郎を両

脇に抱えて海へ飛び込

んだ。新中納言知盛（平

知盛）も、安徳帝の御

船の供をすと言い置

き、入水した。安徳帝は、

まさか入水はなざるま

いと油断している間に、

二位の尼君（平時子）

が帝のお供をして入水

なされた、と聞いただ

けで、その亡骸も見つ

からず、女院（建礼門院・

平徳子）だけが助かり

りになったというのが、

事の次第です。

※2 不愉快そうな様子

で。

※3 それほどの功績の

ある義経が、兄頼朝と

の対面を拒否され、な

ぜ腰越から追ひ返され

たのか、そのとがめら

れた罪を言え、聞いて

義経さへあの通りと世上の見せしめ、わが心中わきまも弁へへず粗忽そこつの雑言ざうごん、尾籠びろう至極※2と戒いましむれば

「ホ、ヲ神妙なり義経。軍の次第そうもんを奏聞そうもんして御前ごぜんよろしく計はらはん」

と表面うわべはぬつ※3ぺり取り持ち顔、御殿間ごてんま深く入りにける

小菰こじとみの蔭かげより左大臣朝方さだむねの諸太夫しよたふ主しゆに劣おらぬ人畜にんちくの、苗字いのみくだいも猪熊大之進いのくまだいのしん※4

「コレく義経殿、ご油断く。国治まつたと
は言ひながら、平家の残党小松さんみの三位維盛これもりが奥方若葉ないしの内侍ないし、そのまゝにおかずとも、なぜ片づけてしまはれぬ」※5

「ホ、ウ何事かと存ぞんぜしに女童おんなわらへのこと、何万人あるとててんがも天下てんかの妨たがげになり申まさぬ」※6

「ナニ妨たがげになり申まさぬ、ウ、それならばこつちも勝手かち、ご主人朝方公あさむね、その若葉わがの内侍ないしにご執心※7」

と皆みなまで言いはせず武蔵坊「ヤアならぬく、平家方の女房にようぼうを秘ひかに引き入いれるとは怪あやしの振ふる舞まひ」

「ヤアしやらくさい、おけく、さ言いふ義経よしかげは平大納言時忠ときただの娘婿むこならずや。※8ア、知しれた、それでは若葉わがの内侍ないしをもうまくくとチエくくつたな」※9

「ヤア、チエくくつたとは、わが君きみを雀すずめのや

※1 仮に事実を偽る者のしわざであつても、ひとたび兄頼朝の命令に弁解べんげもせず、腰越こしから帰かへつたのは、弟の義経よしかげでさえ、あの通りの厳げんしい処遇しよぐうを受けるのだ、と世間の人々へ規律きりぎを正ただしてみせたのだ。

※2 はなはだ無礼である。

※3 ぬけぬけと。

※4 左大臣の家政を司る家来けらいで、仕える主人しゆじんに劣おらない人でなし、その苗字いのみくだいも人ならぬ「猪熊いのくま」大之進。

※5 そのままに生かしておかず、なぜ殺しておしまひにならないのか。

※6 何の事かと思いましたが、女子どものことですか。(平家の女子どもが)何万人生き残つていても、源氏の天下てんかの妨たがげにはなりません。

※7 それではこちらも勝手にいたしましょう。主人の朝方公あさむねが、若葉わがの内侍ないしに深く思おもいを寄よせているのですな。

※8 なんと生意気な、よせよせ。そういう義経よしかげは平大納言時忠ときただの娘むすめを妻つまに持つ、平家の婿むこではないのか。

※9 乳繰ちちくつたな。密会ひそかにあひだしたな。

うにぬかしたな、こつちが鳥ならおのれは蠅はい、

ぶうくぬかさずすつ込め」

と引つ摺つかんでちよいとほうる

音はどつさり

「アイタ、、、、」

「ヤレ荒ら立つるな武蔵坊、退しされく」

と制する折から

御座ござの間の御簾みす捲き上げ左大将朝方、怪しの箱引

んだかへ、緩々かんかんたるその風情※1

「ヤアく義経敬つて承れ。桓武天皇雨乞かんむひの

時より禁廷よしに留め置く初音はつねと名づけたこの鼓つづみ、

義経かねて望む由よし聞こし召し及ばれ、この度の

軍のご恩賞に賜るぞ、拝見※2せよ」

と差し出だす

義経『はつ』と頭かしらを下げ

「数ならぬ身に及びなき願ひ。雨乞かんむひに用ゆる

鼓、軍のためにと存ずるところ、ありがたしあ

りがたし※3」

と箱押し戴けば

「いやとよ、この鼓の裏皮は義経、表皮は頼朝。

君に忠勤をぬきんずる義経を追ひ返せし頼朝は

まさしく朝敵、鼓を打てとは頼朝を討てとの

院宣いんぜんなり※4」

と理を押し枉まげて兄弟仲とし、同士討ちさせてしまは

ん工たくみ※5

義経『はつ』と当惑し、差し俯いて居給ひしが

※1 ゆっくりとした態度で。

※2 義経、謹んでお受け申し上げよ。桓武天皇の御代に雨乞いが行われた時から、宮中にそのまま保管されていた「初音」と名づけられたこの鼓を、義経が以前からほしがっていることを（院が）お聞き及びになられ、このたびの合戦の恩賞としてお与えになられるぞ、拝見せよ。

※3 とるにたりない私のような者が、分に過ぎた望みをいたしました。雨乞いに用いる鼓を戦略に用いようと存じておりました。お与えいただけるとは、おそれ多く、かたじけない。

※4 いやそうではない。この鼓の裏皮は義経を表し、表皮は頼朝である。主君（院）へ忠義をつくして、人一倍卓抜した働きをする義経を、追ひ返した頼朝こそ朝廷にそむく敵である。この鼓を「打て」というのは、頼朝を「討て」との院のご意向、ご命令である。

※5 道理を曲げても、何としてでも兄弟仲を割き、味方同士戦わせ、うまくいけば両方ともに滅ぼしてしまおうという悪たくみである。

「コハ日頃に異なる法皇の勅命、たとへ叡慮に※1背くとも、兄を討つこと存じもよらず」

と差し戻せば

朝方いよくしたり顔

「勅命背けば汝もまた朝敵なるが合点か」

と無理と非道に言ひ枉ぐる

たまりかねて武蔵坊

「法皇様は天下の鑑かがみ、そんな無理を言はつしや

れば天下中が皆無理言ふがご承知か」

と立ち騒ぐ

義経はつたと睨ませ給ひ

「最前より無礼の段々、わが目通り叶はず、退

出せよ」

と叱りつくれば

猪熊は

「よい気味くく」

とほくそづくを※2

目もかけず、朝方に打ち向かひ

「日頃の懇望返つて仇となる鼓、申し受けねば

朝敵、拝領すれば兄に敵対、この上は拝領申し

ても打ちさへせねば、義経が身の誤りにもなら

ぬ鼓、拝領申し奉る」※3

と鼓を取つて退出す。御手のなかに朝方が悪事を

調べの締めくくり、実にも名高き大将と、末世に

仰ぐ篤実の、強く優なるその姿、一度に開く千本

桜栄え久しき※4

※1これは、常日頃とは異なる法皇（院）のご命令。たとえ、法皇のお考えに背くことになったとしても、兄頼朝を討つことは、思いもありません。

※2ほくそ笑む。

※3常日頃からの、私の望みが、かえって私に危害をもたらすことになるようです。この鼓をいただかないことにすれば（院の命令にそむき）朝廷の敵となり、ただけば兄頼朝に敵対することになります。

このような事態になつたからには、（鼓を）いただいても、それを打ちさえしなければ、道理にはずれた行為ともならないでしょう。その鼓を、ありがたく頂戴いたします。

※4（義経は、）朝方の悪事を熟知しつつ鼓を手に出す。実に後世まで名高い大将として、その実直さを尊敬され、強く優れたその姿は千本桜が一度に花開いたようで、その輝かしい繁栄は永遠であると思われる。